

## 日本は、侵略戦争をしたのか？ I

零戦・特攻隊を調べていると、必然的に「あの戦争はなんだったのか」という問題に当たる。

1990年代、当時の総理の細川某は、ひとこと「侵略戦争だった」と言い、村山トシキは、アジア南部をまわって「謝罪行脚」をした。そして、マレーシアのマハティール首相に呆れられて窘められた。

日本は侵略戦争をしたのではなく、生活必需品、特に戦争遂行のための石油を求めて現在のインドネシアに侵攻せざるを得なかった。その結果として、イギリス、フランス、オランダが植民地にして何百年にもわたって虐待・搾取をしていた東南アジア諸国の解放につながった。フィリピンはアメリカの植民地だったし、ベトナムはフランス、ビルマ（ミャンマー）、シンガポール、インドネシア、マレーシア、さらにインドはイギリスの植民地であり、これらの国すべてにまで及んだ。考えてもみよ。当時アジアで独立国というのは、日本とタイだけだった。タイは、イギリスとフランスとの緩衝地帯のようなもので、イギリスもフランスも「せこい話」で、タイの領土を少しずつ侵蝕していたのではなかったか。その他の、現在独立している国々は、日本に助けられ、あるいは刺激を受けて独立したのではなかったか。・・・では日本は、これらの国々を「侵略して」植民地化しようとしたのだろうか。

たとえばインドネシアの独立の話をするれば、オランダは400年間、インドネシアに共通語を作らせず、奴隷のような扱いをしてきた。教育など考えもしなかった。いきなり殴ったり暴行したりは、日常茶飯事であった。日本の今村均大將が進駐して3年で共通語を作らせた。ペタという軍事組織もつくることを手助けした。オランダは、意気地がない国で、3000人の日本軍に対し8万人もいながら降伏してきた。（高松宮が、日本は食えずに戦争に突入したのに、いきなり捕虜の面倒をみななければならないというのは、割に合わぬ話なり、と語った。）・・・今村大將の善政で、インドネシア人たちは心安らかに過ごせた。いきなり殴られるというような野蛮な施政はおこなわれていない。（ちなみに今村大將は、戦後、日本で収監されていたが、部下が南方で捕虜になっているのに自分だけ内地にいるのは申し訳ない、と訴え、マッカーサーも納得して南方に収監された。）

パール判事が語ったように、アメリカがあそこまで日本を締め上げたなら、武

器なき小国といえど起ちあがったであろう。石油などは、ほとんどアメリカに依存していた。これを断たれると、日本は生き残ることができなかった。戦わずに降伏するか、乾坤一擲の大勝負にでるか、の二者択一である。アメリカを見てきた山本五十六にしても駐在武官たちも、戦えば敗れるのはわかっていたはずである。戦わずして降伏したら、まるっきりの植民地になってしまう。経済封鎖の時間が経過すればするほど、条件は悪くなる。

アメリカのさる高官がいみじくも言ったように、「**事実上の宣戦布告は、経済制裁である。**」

半藤某のような生半可な専門家と称する連中の、「日本軍の独走」などといった単純な話ではないことがわかるだろう。あのマッカーサーでさえ、「日本の自衛戦争だ」と公聴会で証言した。それまでに日本国憲法を作成するなど国際法違反は、数えきれないほどしたくせに。

しばらく、この稿を書けなかったのは、ひとつには以下のような書を読み漁っていたからである。順不同で列挙する。

「アメリカはいかにして日本を追い詰めたか」

「なぜアメリカは対日戦争を仕掛けたか」

「太平洋戦争」アメリカに嵌められた日本

「ルーズベルトの開戦責任」

「太平洋戦争」は無謀な戦争だったのか」

「連合国戦勝史観の虚妄」

「原爆を投下するまで日本を降伏させるな」

「捏造された昭和史」

「『日中戦争』は侵略戦争ではなかった」

「アジアの解放、本当は日本軍のお蔭だった！」

「アメリカはどれほどひどい国か」

「日本は勝てる戦争になぜ負けたのか」

「日本海軍 400 時間の証言」

「日本人はなぜ戦争へと向かったのか」

① 外交・陸軍編

② メディアと民衆・指導者編

③ 果てしなき戦線拡大編

「原爆投下」 黙殺された極秘情報

高山正之 「変見自在」 1～10

「異見自在」 世界は腹黒い

ヘレン・ミアーズ

「アメリカの鏡・日本」・・・(この本を読んでアメリカ人が怒り、マッカーサーは、この本の日本語訳の出版を許可しなかった。)

クリストファー・ソーン

「米英にとっての太平洋戦争」 上下

「大東亜戦争は、アメリカが悪い」(これがまた分厚い！)

(最後の2冊はまだ読了していない。)

ヘレン・ミアーズとクリストファー・ソーンは、外国人としては比較的日本の立場にも理解を示している。公平な目で物事をとらえようとしている。

本の題名をみただけで、日本の侵略戦争がなかったことがわかる。それよりも、真珠湾攻撃の際、軍事施設以外の標的には、まったく攻撃していない。それほど日本軍の攻撃精度というか練度が高かったのである。(ルーズベルトは真珠湾攻撃を知っていたが、見殺しにした。)米軍は、冗談でなく、米本土への攻撃を恐れた。

上の30冊くらいの本をまとめることになるが、もうちょっと時間がかかります。どの本で読んだか、一度では覚えきれなくなって、繰り返し読まねばならない。一部は覚えているが、すべてを覚えているわけではないので、読み返しながらかいていきます。そういうことで、詳細については、もう少し時間をください。槌端ではないが、1回読んだだけでは覚えきれなくなってきて、2度も3度も読まねばならなくなってきた。

この間、「ブラックホールを発見した男」(チャンドラ・セカール)や「言うてはいけない」とか、曾野綾子さんの随筆やら、その他の本を何冊も読んでいますが。

ではなぜアメリカは執拗に日本を刺激し続けたのか？ 白人社会の慣行があり、植民地を持つことが許されるのは、彼らだけだったこと。(単なる思い上がりであり、勘違いなのだが。) イギリスやフランスはナチス・ドイツと戦争をしていたものもあるが、実際には、イギリスのみが反撃していたらしい。それらの国の要請があったからでもある。アメリカも直接の関わりがある。フィリピンである。独立させるから、と酷使した挙句、拷問によってアギナルド将軍らを殺しまわった。日本にも攻撃を加えたのであるが、日本軍は山下奉文大将が、フィリピン人を巻き添えにしないように撤退しているのに、米軍は日本人とフィリピン人の区別がつかないから、とりあえず、軒並み殺害しまくる。そのあとで、日本人とフィリピン人とを区別すればいいなどと考えていた。その結果、100万人ものフィリピン人が殺害され、それが日本軍によるもの、とされているのである。……

「アメリカと中国は偉そうに嘘をつく」という本がある。彼らの言い分は、いい加減なものと考えてよさそうである。

さらにもっとも大きな理由が、未開地中国の利益の篡奪争いがある。イギリス、フランスなどに遅れてならじ、と参戦した。利益のためである。このころ、日本の軍部は、傍若無人の振る舞いが多くなり、連合艦隊解散の辞の「古人曰く勝つて兜の緒を締めよ、と」を忘れ、驕慢な態度で世間を睥睨していた。こういう態度が欧米諸国を刺激したことはあるだろう。また、学閥やら先輩後輩で極端に態度が異なる、というような関係がある。そういう意味では、こういう軍隊がなくなったことは歓迎する。

京都は、米人の誰やらが、古都の遺跡を守ろうとしたから爆撃しなかった、などと恩着せがましく言うが、嘘ばかり。京都は、広島とともに原爆投下の候補地だった。だから、なるべく普通の爆撃はしなかったのが本当である。

さらに、500年後のタイムカプセルに、広島には3度にわたって警告したと書いている。オランダの判事が500年後に対しても「嘘をつく気か！」。

アメリカ人にもまれにまともな人間がいる。ヘレン・ミアーズもそうだが、ジョン・フェアバンク ハーバード大学教授の自己批判。「アメリカ人は、自分のことはさておき、自らを道徳的高みに置いて他を見下したがる。」……まあ、こんな品格のない人間はどこにでもいますが。

2016.07.25.